看護学生の実習前の手術室イメージと手術実習の認識

キーワード：手術室イメージ　ＳＤ法　看護学生　周手術期看護

○小林　祐子[1)]、帆苅真由美[1)]、小島さやか[1)]
新潟青陵大学[1)]

Ⅰ 目的

周手術期は、手術侵襲に伴う患者の変化に沿った看護を提供するために、多くの専門的知識が必要となる。Ａ大学では、2年次の講義・演習で手術を受ける患者の看護を学び、3 年次の成人看護学急性期実習（以下、実習）時に、受け持ち患者の手術を見学する機会を設けている。しかし、手術見学前は学生の緊張も強く、実際に手術室に入室した経験が少ない学生にとっては、イメージしにくいものである。

そこで、本研究では実習前の看護学生を対象に、手術室のイメージや授業・実習に関する捉え方を調査し、周手術期看護教育の示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ 方法

1．対象

Ａ大学の看護学専攻3年次生で、領域別実習の急性期看護実習で手術見学を予定している83名。

2．調査時期

2015年4月。

3．内容

調査内容は、属性（手術経験の有無、手術患者受持ち経験の有無など6項目）、手術看護の授業（手術看護の関心（5件法）など3項目）である。手術室のイメージは、実習終了後の数名の看護学生に形容詞対を自由記載してもらい、さらに吉井[1)]の項目（2004）を参考に形容詞対24項目を作成し、SD法（5段階）で測定した。自由記述でも手術室のイメージの回答を求めた。

4．分析

分析は2群間でχ^2検定、Mann-Whitney検定を行い、有意水準を5%とした。手術室イメージは因子分析を行うとともに平均値を算出し、プロフィール図を作成して属性別に比較した。手術看護の授業項目は、Spearmanの順位相関係数を算出した。

5．倫理的配慮

対象に研究の趣旨、成績評価とは無関係であり自由参加であること、個人の特定はされないことを口頭と文書で説明し、協力を依頼した。調査用紙の提出をもって同意が得られたものとした。

Ⅲ 結果

回収数78部（回収率94%）、有効回答数78（100%）だった。内訳は、男性10名（13%）、女性68名（87%）、3割が血液を苦手と回答し、手術経験があったのは14名（18%）、2 年次の基礎看護学実習での手術患者の受け持ち経験があったのは、31名（40%）だった。

3割が手術の授業が好きだったと回答し、手術看護に興味があったのは6割、手術室看護師の講義は約8割が希望し、実習中の教員への相談をしようと考えていたのは9割だった。

手術室実習に関連する心配事の有無では術後の観察59名、術後の計画立案56名、事前学習46名、手術室での自分の動き42名、患者との関係41名、手術室看護師の指導35名、見学中の気分不快28名、見学日の睡眠時間27名、病棟看護師の指導22名、教員の指導10名だった。

実習前の手術室のイメージでは、高得点域が「親しみにくい」「テンポの速い」「せわしない」「きれいな」「緊迫した」「動的な」「はりつめた」「固い」「繊細な」「難しい」「忙しい」「重々しい」であった。男女別のプロフィール図では、「親しみにくい－親しみやすい」「固い－柔らかい」「テンポの速い－テンポの遅い」に差がみられ、手術経験別では、「テンポの速い－テンポの遅い」「きれいな－汚い」「忙しい－ひまな」で差がみられた。

天井効果とフロア効果を確認後に24項目の因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、因子に対する共通性が低い3項目を除外して、21項目で因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。結果、「緊迫感」「親近感」「変動的」「冷厳さ」「俊敏さ」の5因子が抽出された。抽出された5因子の累積寄与率は59.7%、内的整合性を確認したところα係数は0.859～0.517であった。自由記述では、緊張や緊迫感、清潔、怖いなどがあげられていた。

性別と教員への相談（p=0.039）、手術の授業が好き（p=0.014）、血液の苦手さと見学中の気分不快の心配に差がみられた（p=0.006）。手術看護の授業項目に関しては、手術看護の興味と手術室看護師の講義希望に正の相関がみられた（r＝.411,p＜.01）。

Ⅳ 考察

手術室のイメージは、「きれいな」「固い」「動的な」「テンポの速い」が先行研究[1)]と同様に高得点域であり、手術経験別にみると実際に手術経験があるとイメージに違いが出ることが推測された。

先行研究と比較して、5因子の中で「親近感」が抽出されたが、手術経験や手術患者の受け持ち経験、手術看護の興味が影響していると考えられた。

手術経験のある学生は2割と少なかったが、手術患者の受け持ち経験が手術の授業の好きに差がみられていたことからも、実際に受け持つことがその後の授業の理解度や関心にも影響を及ぼすと思われた。学生は手術室での自分の動きなど見学に関することだけでなく、術後の観察や計画立案を気にかけていた。これは術後の展開の早さを認識し、実際に2年次の演習項目であったことが影響していると考えられる。男子学生に対しては、教員から意識して声をかけていく必要性があると思われた。

また、半数が手術室看護師の指導を心配だと回答していたが、手術見学がどのように進むかイメージできず、手術室看護師に接したことのないことが影響していると考えられる。学生の2割が手術の授業を好きでなかった一方で、手術看護に興味のある学生が半数以上いたことから、より関心を持てるような工夫が必要である。

今後は学生が手術室や実習内容をイメージできるように、手術室看護師の講義や画像を授業の中で取り入れていくことが必要であると示唆された。

Ⅴ 結論

1．手術室のイメージでは、手術経験によって「テンポの速い－テンポの遅い」「きれいな－汚い」「忙しい－ひまな」に差がみられた。

2．手術室のイメージでは、「緊迫感」「親近感」「変動的」「冷厳さ」「俊敏」の5因子が抽出された。

3．手術実習に関する学生の心配な事柄を考慮して、手術室看護師からの講義など、手術看護がイメージできるような授業の工夫が必要である。

引用文献

1) 吉井美穂他. 周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌. 2004；5（2）:103-107.